

谷にうたう女

小川未明

青空文庫

くりの木きのこずえに残のこった一ひとひらの葉はが、北きたの海うみを見みながら、さびしい歌うたをうたっていました。

おきぬは、四つになる長ちようきち吉きちをつれて、山やまの畑はたけへ大根だいこんを抜ぬきにまいりました。やがて、冬ふゆがくるのです。白髪しらがのおばあさんが、糸いとをつむいでいるように、空そらでは、雲くもが切きれたり、またつながったりしていました。

下したの黒土くろつちには、黄きばんだ大根だいこんの葉はが、きれいに頭あたまを並ならべていました。おきぬは子供こどもがかげぎみであることを知しっていました。持もつてくるはずのねんねを忘わすれてきたのに気がきがついて、

「長ちようきち吉きちや、ここに待まつておいで、母かあちゃんちゃんは、すぐ家うちへいってねんねねこを持もつてくるからな。どこへもいくでねえよ。」

子供こどもは、だまつて、うなずきました。

おきぬは、ゆきかけて、またもどつてきました。

「ほんとうに、どこへもいくでねえよ。そこにじつとして待まつていれや。」
 そういつて、彼女かのじよは、坂道さかみちを駈かけ下おりるようにして、急いそぎました。

あたりには人の影もなかったのです。くりの木のこずえについていた枯れた葉は、今夜の命も知らぬげに、やはり、ひらひらとして、風の吹くたびに歌をうたっていました。そしてふもとの水車場から、かすかに車の音がきこえてきました。

すこしの間が、小さな長吉にとつては、堪えられないほどの長い時間でした。「おつかあ。」といって、子供は、母を呼んで泣き出しました。

しかし、いくら呼んでも、この子供の声は、下の村へは達しなかつたでありましょう。

このとき、どこからか、笛と太鼓の音がきこえてきました。それは、村の祭りのときにかきかなかつたものです。山の林に鳴く、もずや、ひよどりでさえ、こないない声は出し得なかつたので、長吉は、ぼんやりと、その音のする方を見ると、山へ登つてゆく道を、赤い旗を立て、青い着物をきた人たちが列をつくつて歩いてゆきました。そして、その後から、にぎやかな子供たちの話し声などがしてくるので、泣くのを忘れて見とれてみると、葉の落ちて、裸となつた林の間から、その列がちらちらと見えたのです。長吉は、いそいで、その後を追いかけてきました。

二、三度も彼はころんだけれど、泣きもせずその後を追いかけてゆきました。空で、糸をつむいでいた、白髪のおばあさんの姿が見えなくなつて、風が募つてきまし

た。おきぬが畑はたけにもどつてきたときには、くりのこずえにしがみついて歌うたをうたっていた葉はが、くるくるとまわつて、がけの底そこの方ほうへ落ちていったのです。

「長吉ちようきちや、長吉ちようきちや、長吉ちようきちはどこへいったらう？」

彼かのしよ女よは、あらしのうちを、さがしまわりました。

山やまの上うえへとつづいている道みちは、かすかにくさむらの中に消きえていました。そして、山やまの頂いただは灰色さいいろに曇くもつて、雲脚くもあしが、速はやかつたのです。

村むらじゆうが、大騒おおさわぎをして、長吉ちようきちをさがしたけれど、ついにむだでありました。

年寄としよりたちは、

「前まえにも一度ひとこいうことがあつた。人ひとさらいにつれていかれたか、たぬきにでもばかされたのであろう。」と、囲炉裏いろりに粗朶そだをたきながら話はなししました。

それから、後のちのことです。村むらの人ひとたちは、髪かみを乱みだして、素足すあしでうたつて歩あるくおきぬを見みました。

「ねんねん、ころころ、ねんねしな。

なかなで、いい子こだ、ねんねしな。」

子供こどもを失うしなつた悲かなしみから、気きの狂くるつたおきぬは、昼ひるとなく、夜よるとなく、こうしてうたい

ながら、村道を歩いて山の方へとさまよっていました。

村にあられが降り、みぞれが降りました。そして、山に雪がくると、いろいろの小鳥たちが、里を慕って下りるように、村の娘たちもまた都会を慕ったのです。おかよは、こうして彼女が十六のときに奉公に出ました。

旅に立つ前夜のこと、うれしいやら、悲しいやらで、胸がいつぱいになって、戸の外にすさぶあらしの音をきいていると、ちようどおきぬの前をうたつて通る、子守唄が、ちぎれちぎれに耳へ入ったのでした。なんと、いじらしいことかと、彼女は少女心にも深く感じたのでありました。

月日は、足音をたてずに過ぎてゆきました。

くりの木のこずえで、海の方を見ながら、歌をうたっていた枯れ葉も、いつか地に落ちて朽ちてしまえば、村を出たおかよは、もう二年もたつて、すっかり都のふうにそまつたころです。

ある日おかよは、お嬢さまのおへやへ入ると、ストーブの火が燃えて、フリージアの花が香り、そのうちは、さながら春のようでした。そして、蓄音機は、静かに、鳴りひびいていました。しばらく、うっとりとして、彼女はお嬢さまのそばで、その音にききと

れていると、目の前に広々とした海が開け、緑色の波がうねり、白馬は、島の空をめぐらして飛んでいる、なごやかな景色が浮かんで見えたのであります。

お嬢さまは、窓のところへ歩み寄ると、はるかに建物の頭をきれいに並べている街の方をちらちらと見ました。そして、自分でも、その歌の一節を口ずさみなさいました。

「ねえ、おかよや、おまえ、この子守唄をきいたことがあつて？」と云つて、箱の中から一枚のレコードを抜いて、盤にかけながら、

「私は、この唄をきくと悲しくなるの、東京に生まれて、田舎の景色を知らないけれど、白壁のお倉が見えて、青い梅の実のなっている林に、しめつぽい五月の風が吹く、景色を見るような気がするのよ。」といわれました。

やがて、蓄音機のうたい出したのは、

「ねんねん、ころころ、ねんねしな。

坊やは、いい子だ、ねんねしな。

……………」

という、子守唄でありました。

おかよは目に涙をうかべて、きいていました。哀れな、子供を失つて気の狂つた、おき

ぬのことを思い出したからです。

「どう？ あんたが泣くくらいだから、やはりいいんだわ。この声楽家は、有名な方なのよ。」

「いえ、お嬢さま、どうか、今年の夏、私の生まれた村へいらしてください。谷にはべにゆりが咲いていますし、あの悲しい子守唄をおきかせしたいのでございますから。」

おかよは哀れなおきぬの話をしきかせたのでした。

都会で、はなやかな生活を送っていらつしやるお嬢さまは、高い窓からかなたの空をながめて、遠い、知らぬ海の向こうの国々のことなどを、さまさまに想像して、悲しんだり、あこがれたりしていられたのですが、いま、おかよの話をきくと、このところへは、ほんとうにいつてみる気になりました。朝、汽車に身を委せればその日の中にもおおよの村へ着くのですから。

また、月日は、足音をたてずに、とつとと過ぎてしまいました。

地球の上は、やわらかな風と緑の葉に被われています。うぐいすは林に鳴いて、がけの上には、らの花が香っていました。

気の狂ったおきぬは、その後、すこしおちついたけれど、もうこの村には用のない人と

されて、山一つ越した、あちらの漁村の実家へ帰ってしまったそうです。

「お嬢さま、せっかくおつれもうして、あの女のうたう子守唄をおきかせすることができません。」と、おかよは、なげきました。それをききたいばかりに、わざわざここまで旅行をしたお嬢さまの失望を思ったからです。

しかし、お嬢さまは、都にいらしたときのように、ここへきても笑っていらつしやいまして。

「だけど、いいわ。ここへやってきたかいたがあつてよ。山も谷も、私が、夢で見たよりか美しいんですもの。」

このとき、谷で鳴くうぐいすの音が、かすかにきこえてきました。そして、がけの上では、らんの花が咲いて、今朝から、金色の羽を輝かしながら、小さなはちが、幾たびもそのまわりを飛んでいたのでした。

「まだ、あちらの山には、雪が光っていること。」と、おかよが、ぼんやりと、その方に見とれていたときでした。

「ねんねん、ころころ、ねんねしな——。」

彼女は、たちまち谷に起こる、きき覚えのある、おきぬの声をきいたので、びつくり

したのです。

しかし、それは、そうでなかった。なにか美しい花を見つけて草のしげった、細い道を下りていった、お嬢さまが、高らかにうたった歌の声だったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「谷《たに》にうたう女《おんな》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷にうたう女

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>